なけなしのかね

奈良工業高等専門学校
現代視覚文化研究会
２０２１年度　秋会誌

まえがき

なんでお前まだいるん？という疑問はさておき、どうも現代視覚文化研究会会長の篝火です。自分がまだこんな役職にこびり付いてる現状…いやはやコロナって怖いね。
報告遅れて連絡ツールミスって勧誘もまともに…私のせいだな！

さてこの会誌の名前が『なけなしのかね』になっている理由は、先に話した新型コロナです。まずは高専祭にて秋会誌の完成が間に合わなかったことを深くお詫びします。1月の寒波の中、ここまで遅れた“秋会誌”は後にも先にも私の代だけでしょう。でも逆に私の代で良かったって感じもするんですよね。勢いで引き継いだ会長の役職ですが、確実に自分より上手くやれた方はいるでしょうし、コロナなんか言い訳にせず活気づいたいい部活に戻らなかったのは私の責任でしょう。このまま次の代に引き継がせてしまうのが心残りですが、なんとか生き残ってできる限りのサポートに専念します。まぁ私が中二病発症してない状態は真面目に反省してます。本当に申し訳ありません。

それでは内容説明。
今回の『なけなしのかね』は、どうです？　うっすいでしょう！
私も小説の方で中二全開時の一作組み上げてるのでさぁ、鼻で笑え！
先輩方に手伝ってもらった感じですが、これはあれですね。リアルで恥ずかしいやつだ。印刷するの考えとかないといけません。持ち直した後のげんしけんにて会誌整理してる間に「なにこれうっすwww」と言われれば泣く自身あります。
留年との壁に挟まれた既に頻死の私ですが、最後ぐらいは後を濁さず終えてみたい。来年の春会誌（あれば）に私の名前が載っていなければお察し…

後を濁しまくったのは個人事情を駄弁る私なんですがね！私のことなど気にせず、『なけなしのかね』をお楽しみください。
それでは、控えた学年末試験へと逝ってきます！さいなら！

篝火

目次(お品書き)

小説(Novel)

4.『誰かさんの世界事情』
篝火
5.心向くままに
あしっど

イラスト(illust)

12.緋色
13.14.もちまる
15.あしっど
16.冬月

表紙：もちまる
扉絵/編集：冬月

『誰かさんの世界事情』

篝火

『人の命を何だと思ってるんだ！』

どこぞの正義感丸出しの……勇者さんだったかな？いやこのセリフ誰だっけ？
まぁとにかく、正義感の大きさに実力も付き、常人には口出しできない過去と苦行、それでも削がれぬ人情を併せ持った“キャラ”の言葉だ。
問われるは極悪非道の敵のボス。部下を足蹴にする等のシチュエーション後、心打たれた主人公がそう怒鳴り、とってつけたような問答が繰り返されあっさりと倒され忘れられる系のイベント。

仮に現代ではどう答えられるだろうか。
戦争を経験した方々もおられる日本という島国。そうでなくても拗らせた若者が多い印象により多種多様な答えが返されるだろう。
拗らせていない者がいるのかどうかはさておき、大多数の一人としての私の答えなら

娯楽だ。

あぁ同情とかはご勘弁。そんなガラではない。
だからといって非難される立場でもない。
娯楽ならば遊ぶ者と遊ばれる者がいるが、どちらかと言うと私は後者。だが同情される程のモノを背負っている訳ではないし、自分よりも苦しい人はたくさんいることを百も承知と理解している。
私自身の身の上話等関係なく、世間を一言で表せばそう思った次第。
だからこそ周りがよく見えた。他者に酷く責められたりする事もなく、逆に八つ当たりするほど心身が磨り減ってもいない。決して多く無い目の前の“物事”。手を動かした方が早いと言う程でもなく、少し遠くから見てみようとして。
よく見えて、見えすぎて、
「面倒くさい……」

どうしたいかは関係なかった。
『生きていたくない』、わけではないが、明確に『生きたい』と豪語できるものを持っていなかった。
別ベクトルも同様に、『死にたい』と軽々しく口に出しては勇気もなく、『死にたくない』か？と聞かれれば肯定否定関係なく即答できる口が見つからない。
大体の人が抱えるものとわかっておきながら、自分はどうやら、あまり耐え抜く部類ではなかったらしい。
どちらでもいいならばと悩むことさえ億劫に感じた。

世の中の自殺を選んだ人たちと比べれば酷く不格好で、それこそ同情の余地がない。彼らのことを軽く語るつもりはないが、それでもきっと自分よりかは聡明な理由であろう。
まぁ死人に口無しって言うし、家族も友人も異常なほど心残りが無い。遺書も何も書かなければ勝手に脚色してくれるだろう。どうせならあの上司に的が向かないかな？死体の発見は死臭……冬だけど嫌だなぁ。

そんな不安定な情緒で死へと向かったからだろうか。最後の日に、あんなものと出会ったのは。

◆◇◆◇◆

自殺を謀ったその晩。
まぁどうせならと未練たらたらで。
お手軽な携帯用品スマホを覗き込み『死』や『命』についての他者の持論を縋るように眺めていた。

何も思い付かない癖に何かを探そうと、ただどんどん気力を失っていく中、それが声をかけてきた。

黒っぽい外套に同色の潰れた帽子。強盗とも思える恰好だが、ペストマスクと呼ばれる鳥の嘴のような仮面と、背負った長い……鎌？
頭の中で死神という言葉が反芻される。それほどまでに人とは違う別のものという感覚があった。
私に認識されたことに気付いても、取り乱す様子もない。寧ろ今までずっと居たかのように驚いたのは自分だけ。
しかし相手もどうやら今現れたらしく、開け放たれた窓に足をかけ、スルリと部屋に入りながら、
「なんだ、まだ死んでないのですか」
残念さも垣間見せない無関心。笑うこともできない声音に、寒さが原因ではない震え……現代では似つかわしくない恐怖の感情があふれる。
それでも『生きたい』と……『死にたくない』とも思えない自分に、もうどうしようもないなと自傷した。

結論を言うと
その死神（仮定）は、明確に私の命を奪おうとする行動は見せなかった。固まって動けない私の前を流れるように通り過ぎ、部屋の壁にもたれかかり読書に耽る。本当にそれだけだった。

だがまだ一端の人間である私は、この謎めいた状況に耐えられるはずもない。最初はその死神を注視して……悪くいえば警戒していた。人間である可能性は第一印象とこの常人とは思えない感性（人の家でいきなり寛ぐ等）で九割ほど無いだろう。ちなみに残り一割はただのやべぇ奴。
一般的にかじったゲーム知識のように、不定形な感じではない。ひどく静かな夜中だというのに息遣いすら感じられない点を除けば、黒い翼もなければ唯一露出した手も骨で構成されていない。

そんな成りで緊張感が薄れたのもあるが、開け放たれた窓から吹き込む冷気に頭が冷やされ、せめて閉めさせてもらうよう対話を求めてみる。気分はテロリストに捕らわれた人質。
「あぁお構いなく。死ぬのなら勝手にどうぞ」
マスクで隠れていて視線はわからないが、顔の向きは手の本に落とされたままそう投げかけられる。何かを言う前にかけられた言葉に、収まりかけた緊張がぶり返す。
嫌な汗が背中をつたり、「お構いなく」という無関心を意味する比較的安全な言葉とは裏腹に頭はフル回転しだす。
言葉、死ぬのなら、やっぱり日本語、心詠まれた、内容は関係ない、良くも悪くも無関心、そもそもこいつ……
「私別にお茶出そうとしてないですよ？」
人の家土足で入ってんじゃねぇか。

人は極限まで張り詰められた恐怖の前では正常な判断力が薄まる。
だとしてもつい先ほど確認した事象に“苛立ち”、危険な存在とわかっていながら“皮肉”で返したのは彼女自身、直後に青ざめるほどマズい行動だと理解できた。

幸いというべきか、皮肉で返されたその死神は理解するやいなや攻撃性を持つタイプではなかったらしい。寧ろその逆……痛い程の静寂が過

ぎ、やっと動き出した死神は皮肉で返されたことに、人間らしく吹き出した。

霧散した恐怖心に、拍子抜けした空気に、クツクツと笑う死神（？）。相変わらず顔が見えないが恐ろしさはなかった。

「そうかぁ～……いや、あるいは君だからかな」

「えっと……」

「いやごめんね。割と君たちみたいな人間って、話しかけても無視するから。何もかも諦めましたーって顔でね」

「……」

「人間らしくってのは難しいけど一つ上の立場から、お茶をご所望します。○○さん」

佇まいを直し律儀に靴を玄関まで持って行く死神（？）。

もうどうにでもなれと、死神が例えたままの気持ちで。

言われたとおり、お茶でも用意しよう。

暖房をMAXにした、冷え切った部屋。人間関係が欠落していた自分は親元を離れた後も含めて人を家にあげたことがなかった。

記念すべき第一村人が窓から訪れた死神……自慢できる内容でもないし、上記の通り相手もいない。ネットにでも晒そうかな。

「それでは改めまして。あなたの担当になりました自殺課の者です。人間のように個体名は御座いませんので死神のようなものとお思いください」

「自殺課ですか……」

小さな机を挟み、身嗜みを整えた死神（断定）はそのように自己紹介した。だがあくまでもペストマスクは外さないらしい。どこからともなくストローを取り出し、嘴部分の先端の穴へ差し込んで吸飲していた。シュールである。

「死神ってことはやっぱり死後の世界があるんですか？」

「簡単に『地獄』と『煉獄』と『海』だけですが」

海？

「割とあなたがたが信仰している神、そして死後の世界の理とは無数に存在し、忘れ去られた故機能していない理もあります」

「宗教の話ですか？」

「えぇそうです。端折りますがどちらかというと無信仰なあなたを管轄するのは、この国自体に機能している“仏教”です。内容は似て非なる部分もありますが」

まあ仏教と一所に言っても、ご都合主義に皆々救われるという所もあれば「人間生まれたことが罪なのだ！罪滅ぼしに寄付を！」なんて言う場所もある。

持ちかけた話は静寂が苦手なだけで、死後の世界よりも目の前の死神の方が気になっている。吹き出した頃から見え始めた人間臭さ。対話ができるのは本当にありがたいが、

「まああの世でも甘い話は無いですよ。天国は何もかも叶うってわけじゃないですし、魂を安定させて故人と会わせるなんてどれだけの力が必要か……それを信仰してる一人一人？ありえませんね～」

どうにも“だめ人間”臭いのだ。おまけにフランクな陽キャ成分。近寄りたくない。だがこのままという訳にもいかない。

「私を訪ねてきた用件は何でしょうか？自殺課っていうのもちょっと……死んだ人の魂を集めるお仕事とか？」

「あぁ用件ですね。いやただの忠告ですよ。『自殺はやめときなー』っていう。生きるのを選べばちょっと記憶改竄させてもらうだけですから、普段通り明日から頑張ってください。悪質な人間関係に支障を出す程度の特権一つ二つプレゼントしています」

「……自殺は駄目なんですか」

口を開けば止まらない死神さんの言葉が一区切りついたところで、単なる疑問のようにそう問いかける。

精一杯隠したつもりだったが、“気付かないフリ”をしてくれたのだろう。口調は変わらずだが、真摯に向き合い、隠れている目をこちらに向けて

「問答無用で『地獄』行きです」

その現実……否、あの世の理というものを突きつけてきた。

◆◇◆◇◆

煉獄とは仏教とは関係ない……寧ろ西欧で一般的な、罪人の魂を浄化する層である。犯罪を行った者の魂を収容し、炎で焼ききった後、灰となったものを海へと流す。

海とは……亡くなった魂たちの流れだという。無からは何も生まれないように、犬も虫も人間も、その大きさは違えど川に水を流しただけのように混ざり合い、零れ落ちたそれがまた現世で命として宿るそう。

「自分の前世は偉人だなんて言う人はいますが、同時にゴキブリだったわけでもあったと思うとどうです？」なんて冗談を交え、地獄。

曰わく、言葉では成されない罪の箱。外部からの干渉は不可能で、意識した罪の分だけ、相応の概念的な“苦しみ”に襲われ、二度と輪廻の輪へ戻ることもできない。

吐き捨てられた魂はどす黒く変色しており、泥のように堆積して何百年……他者へ訴えかけることもできない意識は向ける者もいない怨嗟を帯び、尽きるまで嘆きながらやがて名実上の死へ至る。

「観測できないので後半は予想ですけどね」

「根も葉もない……」

「そのための自殺課です。はじめの醜態は話聞かない人多くてですね……ちょっとヤケになってました」

「でもまた人間に生まれ変われる保障はないでしょ」

「色をつけさせてもらいますよ」

「職権乱用じゃないですか」

「自殺課ってだけで周りから嫌な目向けられるんですよ。これくらいやってやりたくなりますよ」

一通りの問答の後、死神さんは立てかけた鎌を持って立ち上がる。

「私の役割は無さそうですし、お暇させていただきます」

「何もかもお見通しなんですか」

「ため息付かないでくださいよ。こっちが付きたいんですから」

自殺する事はどの世界でも同じらしい。

それさえわかれば、心残りはなかった。

「二度と会えないと思います。本日はありがとうございました」

理由はない。死神と出会うようなことがあっても、心が動かなかったあの瞬間からわかっていた。

「地獄に行きたくないからっていう理由もありますよ？忘れてちょっと楽になってまた自殺しようとしても、何度でも足を運びますし、はじめましてと挨拶しましょう」

「地獄っていうのを聞いて怖くはなりました。でも自分はどうしようもない人間なんです。苦しくても何とかなる的な。生憎人の顔覚えるのが大の苦手なので、怨嗟とかは持ち合わせられませんよ」

精神的に見透かされるのならともかく、きっと人間相手ならだれでも騙せられる顔をしていたと思う。どんな痛みよりも、キリキリと胸が締め付けられる。

「あなたは……イレギュラーのようなものでした。死ぬくせに部屋のことで真っ当にキレられるところとか」

「その節はどうもすみません……」

「最後に……あなたの最期へも一言」

死神は訪れた時と同じ様に窓から飛び出し、少し先へ進んだ空中で

こちらに振り返る。
「生きたくないとも死にたくないとも思っても、基本的に生き続けてから考え、悩むものなんですよ、人間は。いらぬ忠告でしょうが」

◆◇◆◇◆

随分長い間見ようとしなかった……我々の治めてきた国はもう既に腐りきっていたらしい。

いくら足掻いても足踏みしかできない者もいる。生まれや育ちから奇異の目に晒される者もいる。
戦い、その頑張りの結果動くことのできない人間を自己責任と突き放す。
本来人類の歴史とは、平定へ向かう途中にその者達を救う手筈だった。

どんな苦境で苦しんでいても、自分から変わっていくことより――――現状維持を願い、夢も希望も救いさえ諦めた方が怖くない、痛くない。
そんなくだらない基盤を作ったのは、この国の上層でも、一人一人の想念の訴えでもなく……
『中途半端に知恵を授けた我々の責任なのだ』
『悩むことをよしとするからですよ閻魔様』
『だからこそお主に頼みたい。自殺者3万人……上辺のみしか捉えとらんが、判断は任せよう。我々の世の理は騙しきれん。だが見つからなければどうということはない。』
『それで見つかったら私一人の責任になるってことですよね』
『……儂も口添えしよう』

『降ろされるどころか消されますよ。只でさえ何とも思わない輩共なんで、冗談でもやめてください』

老衰や病死など自然界による死に罪はない。
だが他殺となると人の想いが込められる。現在の閻魔は困窮の果ての凶行ならばと、救済として特赦を与えるよう神々に頼み込んだ。
しかしその結果、生きることの困難な時代において自らその生を放棄することを、禁忌とし、例外のない地獄行きと課してしまった。やがて狂った人倫が彼の選択をあざ笑うように……

そして閻魔は神に覚られぬよう、死後の住民たちに密命を与えた。
『心が絶望し命を絶つ程までに救いを求める者に限り、励まし救済する任を与う』
次々と現世へと降りていく、“白い”装束に身を包んだ同期たちから離され、
自分だけ追加で与えられた更なる密命。
閻魔の元へと流れてしまった魂はもれなく裁きを受けられる。ならばその元へと届く前に回収してしまえばいい。と。

「私の自己満足きってですが、バレたら消される立場なんですよ。甘々に『あなたは救われるべき人間だ』って言ってもいいじゃないですか」目の前を浮遊する、昇ってゆく薄紅色の……魂。小一時間ほど前まで言葉を交わしたことをつゆ知らず、“黒装束”の自分には気付かず残酷に閻魔様の元へとたどり着くだろう。
「人間っぽいのはご愛嬌……これで売ってるので。それに何もかも救ってやるほどお“人”よしでもありません」

自分の前世はとっくに忘れたが、私自身も悩みに悩んで己を殺し、昔の閻魔様に救われた身。
だからこそこんな役を任されたのだが……

なれない鎌を横凪に振るう。何の抵抗も無く、下に引いていた現世とを繋ぐ糸が切れる。
「この世を羨むあなたに恨まれたって構わない。そして自殺を選ぶのなら、その時こそまた『はじめまして』から始めましょう」
温かな家庭の目星はつけてある。色を付けると約束したから。完成した直後の器へその魂を流し込み、今度こそ生き甲斐を見つけてくれることを願って……

「それでは、よい旅を」

彼女の命自身を……楽しみへと、生きることをただ願う娯楽のようなものへと。

了

心向くまま

あしっど

字を描く。文を書く。拙い文字列は形を成し、意味ある言葉となって紡がれていく。己の中を満たす光や暗闇、もしくは渇望や葛藤。あるいは絶望か。そんな思いを乗せて気の向くままに筆を滑らせる。

こんな駄文、きっと価値は無いだろう。
こんな駄作、恐らく意味は無いだろう。
分かりきった事実から目を背け続けながらただ只管に。
理解できるはずもない真実を求めながらただ闇雲に。

「何の価値も無い」――言われなくとも。
「何の意味も無い」――知っている。
だが、それがどうした。どうせ己の人生すら空虚な物だ。この先必死に生きた所でハッピーエンドが待っている保証などない。

何のために文字を書く？　己の思いを残すため。
何のために筆を走らせる？　己の爪痕を遺すため。
ふと何かの偶然でこれを見た何処かの誰かの記憶の一片に残ればいい。例えほんの少しのかすり傷でも、気付いた時に何かを感じさせる程度でいい。
この私が誰かの痛みになればいい。

己がため？　自分がやりたいから？　そんな綺麗事を並べる気は無い。
醜悪で結構、奇怪でも構わない。正負問わず他人の感情を引き出せるならば本望だ。

ただそれこそが、不幸な事に、私の幸福なのだ。
故にこそ、この駄作とも言えぬ文字列を見た何処かの誰かが幸福であるならば。
私は自己中にもそう思うのだ。誰かの不幸を喜びたくないがために。

――身も知らぬ貴方よ、幸福であれ。他の誰でもない、己のために。

了

hiiro

もちまる

もちまる

あしっど

れ、レポート終わらん…
冬月

あとがき

お久しぶりです。編集の冬月です。2021年度秋会誌の『なけなしのかね』をお読みいただきありがとうございます。まず秋会誌なのに春頃に出てるし、2020年度の秋会誌のはずなのに2021年に出している矛盾については触れてはいけません…なんでしょうこれ…とにかくまぁ、秋会誌出せただけ良しとしましょう。出せないと思っていたのでそれよりかはマシです。

…はい。書くこと以上です。元々文章自体が上手く書けない者なので、これで勘弁して欲しいです。だめ？うーん、そうですね…扉絵とか目次ページのこだわりについて、1人で語りましょうか。

どちらにも共通して言えるのは、白黒で図形を乱用してかっこいいものを作ろう！って感じですかね。案外組み合わせだけでもかっこよくなるんだなぁと思いました。目次ページの右上の音声波形的なのは、バーコード制作ツールで作成したバーコードをいい感じに切って作ったものです。これがかなり気に入ってます。他にも、扉絵のドットの中に混じってる三日月とか（気づいてる人いるかな？）グリッチめっちゃ好きです。グリッチは目がチカチカするよね…（自覚済み）

視覚はやられるけど、かっこいいから許して下さい…グリッチ大好き人間なので…

イラストも1枚提出しましたが、あれはレポートに追われている時に描いた絵なので絶望的な絵になってしまいました…これを見ている学生諸君（特にC科生）は、前もってレポートを終わらせましょうね。人生の教訓です。

次の会誌にはちゃんとした可愛い絵を提出するので、それまで楽しみに待っててくださいね。

と、こんな風に自分語りで締め括って良いのか分からないので、一応げんしけんの紹介をしておきます。もしこれを閲覧している新入学生あるいは在学生は要チェックだぞ！

げんしけんはイラスト班、小説班、音楽班、ゲーム班と4つの創作グループがあってそれぞれが励んでいます。それぞれの班の掛け持ちは出来ます。私は音楽班ですが、イラストを提出したりも出来ているので基本自由です。部室には何人か先輩がいらっしゃると思います。私は部室には基本いませんので、他の先輩方が楽しませてくれますよ、多分。

部自体も自由過ぎるので、兼部も全然おっけー！って感じです。はい。興味があれば来てみて下さい！

さて、ここまでお読みいただきありがとうございました！次の会誌でも（会えたら）会いましょう！

冬月